

武装解除 昭和二十年八月三十日牡丹江省鏡泊湖南湖

頭

入ソ 昭和二十年九月二十日(蘭崗第二百八十作業

大隊)

抑留地 ハバロフスク第十六收容所(ホール地区ビヤ

ズムスカヤ)

復員 昭和二十二年五月二十九日(帰郷同年六月十

一日)

船舶 高砂丸

上陸地 舞鶴港

帰国後職歴

昭和二十三年一月 岩手県技術吏員技師

昭和四十五年四月 岩手県土木部都市計画課長

昭和五十二年四月 岩手県盛岡土木事務所長

昭和五十四年三月 東日本建設業保証会社参事役

昭和五十八年二月 佐藤技術(株)取締役顧問

平成八年七月 佐藤技術(株)常任顧問(現在)

叙勲 平成三年四月 勲五等双光旭日章

(岩手県 田辺 壮久)

戦争と捕虜

岩手県 新沼隆男

昭和十九年春、徴兵検査を一年早く志願して青森県の第十六部隊に入隊。一週間後、博多経由で渡満の命令下る。日本海沿岸を汽車で南下、窓は全部遮蔽板が張られ一切娑婆とは絶縁……幾日経ったか全然分からず、博多には朝霧が立ち込める早朝に到着した。岸壁には三隻の貨物輸送船が船団を組み、その中の第二隻目に乗船出航。

玄海灘は三年来の凧とのものであったが、小山のような大波が襲来。船体がギシギシと軋む。玄界灘はアメリカの潜水艦が頻繁に出没している。果たして前の一隻と後の一隻がやられ、朝鮮の釜山に着いたのは私たちの第二隻目の輸送船だけだった。

正に命運がよかったと思わず身震いをする。列車で満州国遼陽に下車。満州第一〇八師団第五七一部隊輓

馬隊に配属さる。ちなみに、この部隊は昭和十九年八月十五日に創立され、私たちは最初にして最後の初年兵であった。毎日毎日、雨の日も風の日も雪の日も、自動車のバッテリーも凍る厳寒下での戦闘訓練の連続。一期の検閲も、戦局が激しくなり一年教育が半年に繰り上げられる。

昭和二十年七月二日、石頭の予備士官学校に入校。日夜を分たぬ訓練また演習が続く。八月九日午前零時非常呼集。日ソ開戦、牡丹江街に出動。無蓋列車上で父母姉弟へ遺言状を書く。「お国の為に先立つ不幸を詫び、みんな元気で家族一同堅固に暮らして下さい」と記すもいまだ十八歳、まだまだ死にたくないの一念、悲しくも淋しいものであった。

牡丹江を背に傾斜面に菱形陣形にタコツボを掘り布陣する。折柄、ソ連の複葉単発機が陣地上を超低空で偵察飛来。一斉射撃するもなかなか命中せず。これで我が陣地の全容が明らかになってしまった。その後で双発爆撃機の機銃掃射の返礼である。タコツボは件のごとくなす術もなく、機銃掃射は黒光りする翼を翻し、

獲物に襲いかかる鷹のように反復攻撃である…。

タコツボの中では、大腿部貫通で血が噴き出て歯を食いしばっている候補生を叱咤激励し、携帯した脱脂綿にヨーチンをたっぷりつけ、針金の先に縛って煙突掃除のように傷口より通して消毒手当をするが、激痛のため失神してしまった。また隣では目を開けたまま戦死している候補生、肩から血を噴き出し呻き声をあげている者、鉄兜ごと頭を撃ち抜かれ即死の候補生などなど血の海であり、戦争は理性などみんな麻痺して気狂いにする、恐ろしく、この世の地獄さながらの惨状である。

昼間の戦闘で疲れ切った体をタコツボに委ね、満天の星を眺めながら、今日は生きているが明日は我が身と覚悟を決め、いつの間にか眠ってしまう。突然起こされ、大隊本部で「第五軍師団司令部の官邸爆破」を命ぜられ、戦友梅野と杉山と共に司令部に辿り着き、奥から杉山、真ん中に新沼、玄関には梅野と位置装着し、五十キロ爆雷で爆破を成功させる。このとき梅野が左肩を負傷した。帰隊は牡丹江河岸の鉄船で本隊に

追いつくはずであったが、探しても鉄船が見当たらない。霧がかかっていたが、一条の黒い線がある、まだ鉄橋は落ちずにあった。新沼と杉山で負傷した梅野を庇いながら渡橋中、対岸より友軍の将校が日本刀を振りかざし「渡っちゃいかん」と怒鳴っている。進むも死、退くも死、急ぎ着剣し将校目がけて突撃する。将校は退いて「すぐ脇の壕に入れ……」と。飛び込むや否や一大音響と共に真っ黒な煙、紅蓮の焰と共に鉄橋が真っ二つに噴き上げられ落ちていった。正に危機一髪、九死に一生を得る。任務遂行を副官の区隊長に復命。鉄船がないので鉄橋を渡って来たことを告げると、いきなり鉄拳のビンタを受け、その場に転倒する。決死で爆破を成功させ、しかも戦友が負傷したのを介抱しながらの復命である。ムラムラと怒りがこみ上げ、副官に銃を構え撃とうとした。副官が軍刀なりピストルを抜く間には九九式の銃が火を噴く。副官は真っ青であった。戦友二人は慌てて「新沼、止めろ」と両脇から押えに掛かった。撃つ気はなくなった。これから苦難の逃避行が連日連夜、雨の中続く。

横道河子で武装解除。敗戦よりも、もう殺し合わなくても済むと全身の力が抜けていく。ホッとす。ロボロの夏服、厳寒とロクな食糧も与えられず捕虜となり、シベリアへ。

列車は昼夜の別なく猛スピードで北へ北へ走っていく。イズベストコーワヤ（石炭の町）の近くのコレドールに下車したのが十一月の初旬、シベリアはもう雪の銀世界である。

肉体的にも精神的にも人間の限界を超えていた。深い雪の中を這うようにして喘ぎ喘ぎ歯を食いしばっての行軍。ソ連兵士の怒号と威嚇に追い立てられ、屠殺場へ引かれる羊に似てただ黙々と、転んでは起き、立ち上がっては滑り、転び、次第に落伍する候補生が出てきた。落伍すれば凍死か、群狼の餌食になるだけだ。肩を貸し励まし合って、吹雪で前の人影が見えなくなる……必死に歩く、喉が渇く、足は鉛のように重く、転んだとき、両手で雪を掬い口に押し込む。顔中雪だらけにして転んで起き上がれない戦友を再び介抱する体力も気力も尽き果て、ただただ前の戦友の背

中を見失うまいと必死の雪中行軍であった。

ようやく第一〇八收容所に辿り着く。ここで收容所の炊事班長を命ぜられ、戦友たちの炊事に専念する。酷寒のシベリアでわずかな黒パンとカーシャ（おもゆ状のもの）と塩味のスープで働く戦友たち。食事分配は一グラムの誤差もないように爪楊枝を使って黒パンの配給である。生命を維持するためのギリギリの食糧である。

あるときの食料受領のことである。いつものように馬糧でロシア倉庫に行き米や雑穀を受領して、最後に麻袋でUSAマーク入りの牛缶を数えながら入れるのを確認して受領したはずの缶詰が一個空ではないか……。早速ソ連人倉庫へ行き抗議したが聞き入れられず、收容所長に糧秣係の不正さを訴えたが却下される。缶詰は上下とも蓋なので、底の部分を見せて音のしないように入れたものである。薄暗いランプの下での受領であった。私は結局作業隊に出されることとなった。今でもあのころを思い出すたびに、戦友たちに済まぬことをしたと自責の念にかられる。

炊事場の衛生管理は糧秣係の妻である。彼女が監督に、外から泥靴で入って来ては床が汚れて汚いと激しく怒鳴り散らす。床に熱湯を撒いて円匙でガリガリ削るように掃くと床が白く木屑が出てくる。その間にも奇麗になった床を所構わず土足で歩き回るのでお手上げである。余りにもガナリ立てるので業を煮やして「日本の女性はもっと優しく言うぞ、貴女も女性なら余りがナリ立てないで欲しい、まるで男ではないか……男も女も同じではないか」と詰め寄ると、彼女いわく「ソビエトでは男も女も同じである」と。私も意地になり「男と女との違いがあるだろう」と畳みかけると「違いはある」「どこだ」と詰問すると彼女は少し間をおいて「男と女の違いは喉である、あとはみな同じだ」と。

私たちは、しばらくあっけに取られ、顔を見合わせるばかりである。当時日本では軍国主義教育で、家長の教育を受け男尊女卑が当然視されていた。恰も丸太棒で頭をガンと殴られたような衝撃を受け、訳が分からなくなってしまうた。

間もなく他の収容所に移動した。伐採作業から帰って丸太の二段ベッドに横になり休んでいたとき、一人の品の良い年配の婦人が入って来て、雑巾を持って私たちのベッドの下に潜り込み、雑巾掛けをするではないか。初め私たちは、ふて腐れていたが、どうも下で母が雑巾掛けをしているように気が咎め、鄭重に雑巾を受取り掃除をしました。彼女はニコニコしながら、優しい目と穏やかな顔立ちで見ている。折しも巡察のソ連将校が彼女を見つけて慌てて拳手の礼をして通り過ぎたので、後でソ連兵に聞くと、この所長で共産党員であると誇らしげに話してくれた。母親のような女性所長。

収容所の生活、毎日の重労働は筆舌に尽くせぬ苦難の連続でした。前労働から帰って二段ベッドに横になっている戦友に声を掛けると、「済まないが水が欲しい、汲んで来てくれ」と。……急いで缶詰の空き缶に汲んで「水だよ」と声を掛けたが返事がない。「おいっ……どうした」と揺り動かしても何の返事も反応もない。体は骨と皮ばかり、食べたものは全然消化されずその

まま排泄され、栄養失調で水を頼んだ時には既に足の方から死んでいたのだ。どんなにか日本に帰りたかったであろうに……。皆で涙し埋葬する。明日は我が身かと不安と焦燥の念が走る。

私たち戦争体験者は、私たちが受けた苦しみや悲しみを二度と繰り返してはならない。被害者を二度と作ってはならないし、作らせてもならないと思う。

【執筆者の紹介】

現住所 岩手県大船渡市盛町木町五一―一八

入隊前 印刷業

入隊 昭和十九年十月 弘前市第十六部隊

武装解除 昭和二十年八月 満州横道河子

復員 昭和二十三年五月三日 舞鶴

復員後 印刷業自営

全抑協 気仙支部役員

(岩手県 田辺 壮久)